OCHA-SDGs 学生委員会
2025 年度　活動報告書

お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所

OCHA-SDGs 学生委員会 2025 年度 活動報告書　目次

Ⅰ OCHA-SDGs 学生委員会について ……………………………………………1

Ⅱ 2025 年度の活動

各プロジェクトの活動

1. おゆずりフェスプロジェクト ……………………………………………2
「おゆずりフェス」「都市鉱山企画」の開催
2. 規格外野菜プロジェクト ………………………………………………3
干し芋の残渣活用のための意見交換会の開催
3. 北区食品ロス削減プロジェクト …………………………………………4
食品ロス削減に向けた北区との協働
4. 手話べりプロジェクト …………………………………………………5
「手話べり会」を中心とした活動の開催・参加
5. 他大学連携部 ……………………………………………………………6
ⅰ.「Sustainability Week 2025」の企画、運営及び開催
ⅱ.「文京区クールアースフェア」への出展
6. フードドライブプロジェクト ……………………………………………8
ⅰ. 附属小での授業参画
ⅱ. 2025 大学フードドライブ実施
7. プラントベースフードプロジェクト ……………………………………10
インスタグラム発信及び「Sustainability Week 2025」への参加
8. マイボトルを持とうプロジェクト ………………………………………11
ウォーターサーバーサービスの展開

その他の活動

9.「～食べ残しをなくそう！～食品ロス削減 mottECO FESTA 2025」
「第 9 回食品ロス削減全国大会 in 千代田」への参加 ………………………12
10.「おにぎりアクション 2025」「おにぎりアクション FOR JAPAN」への参加 ……………………………………………………………………13
11.「文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会」への参加……………………………………………………………14
12. 徽音祭への出展 …………………………………………………………14
13. 公開シンポジウム「災害レジリエントな社会の実現に向けて ～避難生活の質の向上を目指す～」でのポスター掲示 ……………………………15
＊各プロジェクトのロジックモデル

Ⅲ SDGs 推進研究所について ……………………………………………20

Ⅰ OCHA-SDGs 学生委員会について

OCHA-SDGs 学生委員会はお茶の水女子大学 SDGs 推進研究所（2022 年 4 月発足）の学生組織として立ち上げられた。学生が主体となり、「生活者起点の SDGs」をテーマに各々の興味関心に従って活動を行っている。プロジェクトによっては附属学校園や企業、自治体との連携も活かして活動を展開している。

Ⅱ 2025 年度の活動

OCHA-SDGs 学生委員会は 2022 年度に活動を開始している。2023 年度は Education for Sustainable Development（ESD）班、食班、環境班の 3 班に分かれて活動していたが、2024 年度からはプロジェクト制へと移行し、各々が興味のあるプロジェクトに所属する体制での活動を行っている。2025 年度は委員会内で大定例会を開催し、各プロジェクトは作成したロジックモデルを基に活動を展開した。

大定例会は、「大局を捉えなおす」ことと「交流を深める」ことを目的とした、通常行っている定例会から進んだ活動の枠組みである。「大局を捉えなおす」とは、本委員会を構成する各プロジェクトが現在進行形で取り組む活動を、その出発点と目指す未来から捉えなおすこと、「交流を深める」とは委員同士のつながりを深め、委員会の活性化につなげることである。

活動内容は二部構成となっている。

	日程	活動内容
第一部	2025 年 9 月 29 日(月)	ロジックモデルの紹介と交流会
第二部	2025 年 10 月～12 月	ロジックモデルの作成・発表

ロジックモデルを作成することにより、（1）プロジェクトを別視点から見直すきっかけづくり、（2）プロジェクト内容の発信力向上、（3）メンバー間の交流促進、（4）モチベーションの向上、という効果が見込まれ、これがひいては「持続可能性」について議論されるときに見落とされがちな、「活動そのものの持続性」につながるという視点を重視する。

委員内事後アンケートより、第一部を通して、異なるプロジェクトの学生同士がお互いの活動について分かち合う良い機会となり、横の連携の可能性も見えた。また、プロジェクトの継承や外部とのつながりを共有するなど、新たな気づきや交流を通じて仲間意識を高めることができた。

全体を通じては、本企画は各プロジェクトが自らの活動を大局的に捉えなおす契機となったと評価できる。一方で、時間設定やテンプレート設計の改善など、より効果を高めるための課題も明確になった。ロジックモデルを単なる資料作成にとどめず、継続的な活動改善と外部発信の基盤として今後も活用していきたい。
（各プロジェクトのロジックモデルは 13. 公開シンポジウム 参照）

（ロジックモデルのテンプレート）

1.〈おゆずりフェスプロジェクト（旧シェアリングサービスプロジェクト）〉
「おゆずりフェス」「都市鉱山企画」の開催

おゆずりフェスはお茶大内の学生・教職員から回収した服や文房具、日用品を学内で無料のフリーマーケットとして譲渡するイベントで、2024 年度より始動した。自分は使わないが、誰かにとって利用価値のあるモノをつなぎ、無駄な廃棄を減らしてリユースのサイクルを長くすることを目的としている。2025 年度は、2024 年度の開催が好評だったことから、その開催分で未譲渡になった回収品の再出品を兼ねて第 3、4 回おゆずりフェスを企画した。

また、第 4 回おゆずりフェスと並行し、初めて都市鉱山企画として不要な小型家電の回収・譲渡を実施した。貴重な金属資源のリユース促進を目的として、学生・教職員から対象 8 品目を回収し文京区へ引き渡した。
おゆずりフェスの資源循環の理念と高い認知度に着目して実施した取組である。

【対象】本学学生、教職員、関係者
【回収/譲渡対象品】
（おゆずりフェス）衣類、バッグ、文房具、雑貨、食器等の日用品
（都市鉱山企画）携帯電話/スマートフォン、携帯音楽プレイヤー、携帯ゲーム機、デジタルカメラ、ポータブルビデオカメラ、電子辞書、卓上計算機、AC アダプタの 8 品目の小型電子機器

第 3 回、第 4 回　おゆずりフェス

回収ボックス設置期間	（第 3 回）2025 年 6 月 9 日(月)～13 日(金) （第 4 回）2025 年 12 月 1 日(月)～5 日(金)
設置場所	大学図書館入り口、生協 1 階
イベント期間	（第 3 回）2025 年 6 月 16 日(月)～20 日(金) 昼休み （第 4 回）2025 年 12 月 8 日(月)～12 日(金) 昼休み
開催場所	図書館前の広場

第 1 回　都市鉱山企画

対面回収期間	2025 年 12 月 8 日(月)～12 日(金) 昼休み
譲渡場所	文京シビックセンター　リサイクル清掃課

第 3 回の回収数 250 点に対して、第 4 回は回収数 405 点となり、合計 277 点を譲渡した。アンケート結果を含めて知名度の向上が認められ、これまでのイベント開催や広報、イベント開催場所の変更の成果が出ていると見ている。需要の高さから、今後もおゆずりフェスの開催を予定している。

都市鉱山企画では、スマートフォン 2 台とウォークマン 3 台を回収し、文京区へ引き渡した。今後の開催は、知名度・需要の低さや学生・教職員の対象機器の保有数の少なさ、データ処理の手間を踏まえ、慎重に検討する。

（おゆずりフェスの様子）

（文京区の回収ボックス）

2.〈規格外野菜プロジェクト〉干し芋の残渣活用のための意見交換会の開催

規格外野菜プロジェクトは、市場に出回らない規格外野菜の新たな活用方法を共に考え、実践するプロジェクトであり、価値ある食材を無駄にしない持続可能な社会を目指している。

（イベントの様子）

2025 年 6 月 4 日、本学で、江戸川学園取手中・高等学校調理同好会とともに、本学の Ochas ファームチームと意見交換会を開催した。会中では、生徒の発案をもとに一緒にアイデアを出し合いながら、今後どのようにプロジェクトを進めていくかについて建設的な議論が交わされた。会の前にはキャンパスツアーを実施し、調理同好会の皆さまに本学の雰囲気を感じてもらう良い機会となった。

規格外野菜プロジェクトでは、Ochasのファームチームと協力しながら、調理同好会の皆さまとの協働を目指している。今回の意見交換会をはじめとして、両校のさらなる交流とアップサイクルの啓発活動への取り組みが一層深まることを期待する。

今後は、具体的な商品企画や試作を重ね、地域に根ざした持続可能な食品開発を推進していく。また、プロジェクトの成果を広く発信し、環境負荷の軽減と食品ロス削減の啓発にも力を入れていく予定である。

3.〈北区食品ロス削減プロジェクト〉食品ロス削減に向けた北区との協働

2025年5月から12月にかけて、東京都北区と協働したプロジェクトが始動し、食品ロス削減への意識向上と消費者の食べ残し削減等の取り組みを進めるための制度案を検討した。月に一回程度のワークショップ・報告会（表1）を中心とし、食品ロスの現状の課題を把握するための事業者へのインタビュー調査や、制度案に対する意見を集めるためのアンケート調査も実施した。

表1

回	月日	内容
1	5月8日	メンバー顔合わせ、課題の共有、活動方針の検討
2	5月23日	北区の概要紹介、他自治体での取り組みの共有 ブレインストーミング：現状把握（課題を抱える主体、課題の内容）
3	6月24日	インタビュー調査の進捗報告
4	7月15日	インタビュー調査の結果報告 ブレインストーミング：効果が見込める全体的な制度設計
5	8月8日	中間報告：これまでの活動の振り返り ブレインストーミング：具体的な制度内容
6	9月19日	飲食店アンケート実施に向けた検討 ブレインストーミング：具体的な制度内容
7	10月14日	アンケート案の共有、他自治体の要件認定状況の共有
8	11月28日	アンケート案の共有、区への提案に向けた準備
9	12月10日	最終報告：これまでの活動の振り返り、制度の提案

2025年12月10日(水)に行われた最終報告会では、これまでの活動内容と「北区版食べきり協力店（仮称）」制度の内容について発表した。インタビュー調査やアンケート調査の結果をもとに、事業者が積極的に食品ロス削減に取り組むことを応援する制度内容とし、認定に伴う事業者へのインセンティブや、事業者が抱える障壁への対応、広報戦略、制度名の案についても提案した。最終的に、

制度案は北区に全面的に受け入れられ、2026 年度には「もったいないゼロ応援店」として制度の実用化に向けて準備を進める予定だ。

8 か月にわたる協働を通して、食品ロス問題や北区の飲食事業者が抱える課題への理解を深めるとともに、ディスカッションやインタビューを通じて自らの考えを深め、視野を広げる貴重な機会となった。

（最終報告会の様子）

4.〈手話べりプロジェクト〉
「手話べり会」を中心とした活動の開催・参加

手話べりプロジェクトは、キャンパス内で気軽に手話でコミュニケーションをとることを目的として、2024 年 6 月に活動を開始した。情報保障の観点から、音声に頼らないコミュニケーションに慣れることを活動の第一目標として設定し、手話に加えて指文字や筆談の活用も勧めている。活動の中心となる「手話べり会」は、手話による交流を楽しむ会であり、プロジェクトメンバーが参加者に手話を紹介するとともに、参加者同士がペアを組み、手話を用いた会話を通じて交流を深めている。

（手話べり会の様子）

2024 年度 7 月以降、学内全体から参加者を受け入れて昼休みに実施しており、開催頻度は概ね 1 週間に 1 回である。2025 年度は合計 39 回実施した。特に 11 月は、耳の聞こえない・聞こえにくい人たちのための競技大会である「デフリンピック」の開催に合わせた特別月間として、競技の種類や関連手話を中心に学び、デフリンピックの盛り上がりの一助となるよう努めた。

手話べり会の他にも、手話を取り巻く話題を取り上げたディスカッションや、手話を公用語とする飲食店の訪問、早稲田大学の手話サークルが開催する交流会への参加なども行なった。

今後も手話べり会の開催を続けるとともに、より多くの参加者を呼び込む工夫や、新しいイベントの企画をしていきたい。

5.〈他大学連携部〉

ｉ.「Sustainability Week 2025」の企画、運営及び開催

Sustainability Week 2025 は、「SDGs について自分ごととして考える 1 週間」をテーマに掲げ、①地球環境に関心を持つ人材の育成、②大学の壁を越えた交流、③社会への発信を目的に実施した。6 月 16 日(月)から 6 月 21 日(土)の 1 週間を中心に、6 月上旬から 7 月上旬にかけて、学内外で活動した。

他大学連携 SDGs イベントである Sustainability Week 2025 を、UTokyo GXSN（東京大学）、プラごみ減らし隊（東京農工大学）、阪大マイボトル推進プロジェクト Carry My Bottle（大阪大学）、OCHA-SDGs 学生委員会（本学）の 4 大学の学生組織を中心に、複数の大学組織が協働して運営・実施した。

参加大学間で共通した企画は、最終日である 6 月 21 日(土)、東京大学駒場 21KOMCEE EAST でのハイブリッド形式の交流・音楽イベントであり、複数の活動組織の学生や社会人が参加した（図 1）。午前は、各団体の活動報告を通し、今後どのようなアクションを起こせるかについて考えた。午後は、Climate Live という気候変動と音楽を融合させたイベントが実施され、交流を深めることができた。

（図 1）

学内企画

	SDGs 図書企画	第 3 回おゆずりフェス	プラントベースフードに関するアンケート
活動期間	6 月 4 日(水)～7 月 3 日(木)	6月 16 日(月)～20 日(金)	6 月 16 日(月)～20 日(金)
場所	本学附属図書館西側エントランス側の新刊図書コーナー	大学附属図書館前	大学生協内 ホワイトボード

また、本学内においても附属図書館や大学生協と協働し、3 つの企画を実施した。1 つ目は SDGs 図書企画である（図 2）。附属図書館内で、SDGs に関連するテーマの書籍 20 冊を、手書きポップとともに 1 か月間展示した。2 つ目は第 3 回おゆずりフェス、3 つ目はプラントベースフードに関するアンケート調査であり、具体的な取り組みは各プロジェクトに依頼した。

連携企画のイベントには 50 名近くの参加者があり、活動成果報告や交流を通し他大学とのつながりを深めることができた。また、学内企画は多くの学生が立ち寄る場所で実施できたため、委員会活動や SDGs への関心を高めることができた。

（図 2）

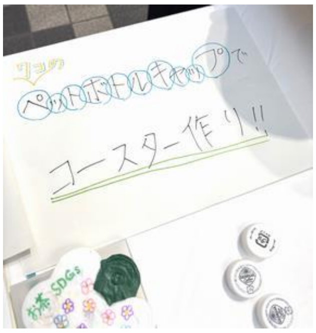
今後は連携企画への参加大学の増加に向けた働きかけと、本委員会内の他プロジェクトとのさらなる協働に取り組んでいきたい。そして、本学の学生や教職員、さらには近隣住民の本委員会への関心を高めることを目指し、継続して活動する予定である。

ⅱ.「文京区クールアースフェア」への出展

クールアースフェアは、2023 年から毎年参加している、文京区の環境系イベントである。来場者に環境問題を楽しみながら身近に感じてもらうとともに、フェアに出展した企業・大学の方を含め参加者に、委員会の活動を知ってもらうことが目的である。

今年度は、文京シビックセンターで 8 月 2 日(土)に行われ、東京大学や東洋大学の学生組織と協働し、クイズラリーを実施した。また、その景品として、オリジナルカードを作成し、裏面にウォーターサーバーに関する豆知識を記載することで、家に帰った後も楽しく環境問題について考えることができるように工夫した（図 1）。クイズラリーに加え、本委員会では、マイボトルを持とうプロジェクトの活動に関する展示や、ペットボトルキャップをアイロンで溶かすだけで完成するコースター作りのワークショップを実施した（図 2、図 3）。

（図 1）



（図 2）

（図 3）

クールアースフェア 2025 全体では 1,504 名、本委員会の展示には 100 名近くの参加があった。他大学の学生組織と実施したクイズラリーを通して、3 大学の展示を見て回ってもらうことができた。特に、子どもたちにはクイズラリーとコースター作りの両方を楽しんでもらえた。また、ペットボトルキャップでコースターが作れることに驚いていた方も多く、SDGs をより身近に感じてもらえた。
今後も継続して参加することを望んでいる。さらに、東京大学、東洋大学だけではなく文京区内の他大学とも新たに連携し企画を実施したい。

6.〈フードドライブプロジェクト〉

フードドライブとは、家庭に眠っている食品を回収し必要としている人に届ける活動のことである。本学では 2022 年度より、株式会社セブン＆アイ・ホールディングスとの協働の一環として、幼稚園から大学までが連携してフードドライブに取り組んでいる。学生委員会は、実働部隊として活動のサポートや附属学校園との交流で中心的な役割を果たしている。

ｉ. 附属小での授業参画

2025 年 9 月 16 日(火)、19 日(金)に、お茶の水女子大学附属小学校６年生の家庭科の授業にて、フードドライブ事前授業を行った。附属小学校で 10 月に開催するフードドライブの開始前に、活動についての理解を深めるとともに、何のために行うのかを考えることを通して、参加の姿勢を再確認することを目的とした。

(授業の様子)

授業では、フードドライブに関する〇×クイズやフードバンクの見学及びボランティアへの参加報告を行った。また、タブレットを用いたワークを通して、受け取る人を思いやって食材を選ぼうという「おすそ分け」のコンセプトを伝えた。生徒たちはクイズにも積極的に参加し、講義にも関心を持って聞いている様子が伺えた。授業の最後にはワークを通して考えたことを共有する時間をもち、生徒たち同士で考えを深めていた。授業に参加した学生委員も、小学生の自由な発想から新たな気づきと視点を得る時間となった。
さらに 2025 年 9 月 22 日(月)には、お茶の水女子大学附属小学校５年生の家庭科の授業にて、給食の残菜をテーマとした授業を行った。食に関連した身近な SDGs を取り扱いたいと考える中で、附属小学校の家庭科の先生より、給食の残菜に課題意識がある一方で、無理して食べることは苦痛になりかねず、個人の発育の事情も考慮し、一概に残菜削減を推し進めることは難しいとの見解が示され、

普段の食事が当たり前ではないという価値観をもつことが、結果として残菜削減に繋がるのではないかと考えた。

授業では、生徒自らが日頃の給食や食生活を振り返るきっかけづくりを目的とし、目の前の給食への感謝の気持ちを持つことや、苦手な食べ物がある人の気持ちを尊重しながら、一緒に食事をする楽しさを大切にすることを伝えた。食品ロスや貧困に関する〇×クイズ、写真を用いて普段の給食を振り返るワークを授業の導入とし、普段食べている給食が当たり前なのか問いかけた。その後、残菜の行方と具体的な量を示すことで給食の現状を伝えた。

また、栄養教諭の先生と給食調理室の責任者の先生に、残菜を減らすための工夫や小学生に伝えたい思いについてお伺いしたインタビュー動画を上映した。最後には、給食を食べる際に意識できることについて、グループ内で話し合う時間を持った。実際の残菜の量や、先生方のお話は小学生にとって印象に残るものだったようで、苦手なものに一口でも挑戦する、という声が多く聞かれた。

ⅱ. 2025 大学フードドライブ実施

2025 年度 12 月 1 日(月)～12 日(金)にかけて、大学構内でのフードドライブを実施し、本学で 78 個、約 17kg の食品が集まった。

大学フードドライブを実施するにあたって、学内のすべての学生・教職員を対象とし、事前と事後にアンケートを行った。

(使用した回収ボックス)

事前アンケートでは 31 人の回答が得られた。フードドライブの認知度を問う質問では、「具体的な取り組みも知っている」と回答した人の割合は 29%、「なんとなく内容を知っている」と回答した人の割合は 25.8%、「名前は聞いたことがある」と回答した人の割合は 19.4%、「全く知らない」と回答した人の割合は 25.8%であった。昨年までの大学内のフードドライブの参加有無を問う質問では、「昨年度はお茶大に在籍していなかった」と回答した人の割合が 41.9%を占めたが、「2 回以上参加した」と回答した人の割合は 6.5%、「1 回参加した」と回答した人の割合は 3.2%、「開催していることは知っていたが、参加しなかった」と回答した人の割合は 19.4%、「知らなかった」と回答した人の割合は 29%であった。

以上のことから、大学フードドライブを通して「フードドライブ」自体の認知度を高めることと、より多くの人に「フードドライブ」に興味を持ってもらい大学フードドライブに参加してもらうためにプロジェクトの宣伝に力を入れることが課題であることが分かった。

7.〈プラントベースフードプロジェクト〉
インスタグラム発信及び Sustainability Week 2025 への参加

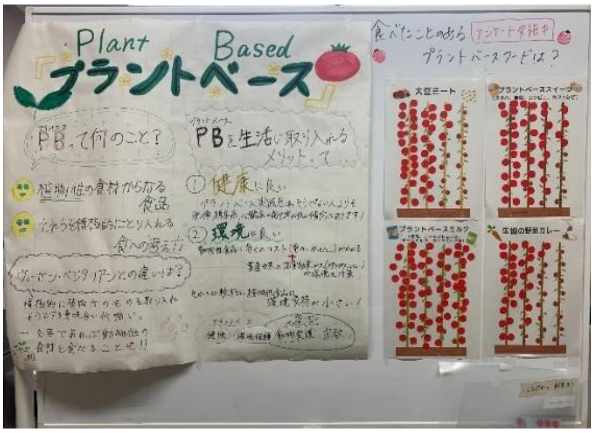
プラントベースフードプロジェクトは、プラントベースフードの魅力を発信し、日常的な食の選択肢としての認知拡大を図ることを目的として、2023 年 6 月に発足したものである。

主たる取り組みとしては、学内食堂に対しプラントベースフードのメニュー提案を行う「学食企画」と、本プロジェクトが運用する Instagram アカウントを通じた情報発信を行う「Instagram 企画」の二軸がある。2025 年度においては、後者の Instagram 企画を活動の中心として展開した。また、昨年度に引き続き OCHA-SDGs 学生委員と他大学の連携イベントである Sustainability Week 2025 に、生協２階においてアンケート及び展示を行う形で参加した。

（Instagram での投稿の様子）

Instagram 企画は、2023 年 11 月の開始から現在に至るまで継続的に実施しており、毎週月曜日に定期投稿を行っている。主な発信内容は、市販のプラントベース商品（主として植物性食品）の紹介及び関連したプラントベース情報の提供である。フォロワーは、本学の学生を中心として 109 人（2026 年 3 月 31 日現在）おり、学生の視点から日常に取り入れやすい商品を取り上げることで、プラントベースの価値を身近なものとして伝達する点において一定の成果を上げたと考える。今後は、発信内容の一層の充実を図るとともに、フォロワー数の拡大を通じて情報発信力の強化に努めたい。

Sustainability Week 2025 では、開催期間である 6 月 16 日(月)～21 日(土)に、本学生協食堂 2 階において、プラントベースに関する情報発信活動を実施した。具体的には、ホワイトボードを設置し、関連情報をまとめたポスターの掲出及びアンケートの実施を行った。学食利用者を対象としたアンケートの結果、プラントベースフードの中でも「プラントベースミルク」や「プラントベーススイーツ」の喫食経験が比較的多いことが明



（プラントベースに関する情報発信）

らかとなった。この結果は、今後の発信内容や企画立案に活かしていく予定である。

また、次年度においては、本年度未実施となった学食企画についても再始動を予定しており、オンラインとオフラインの双方からプラントベースの普及促進に取り組むことで、より実効性の高い活動へと発展させていきたい。

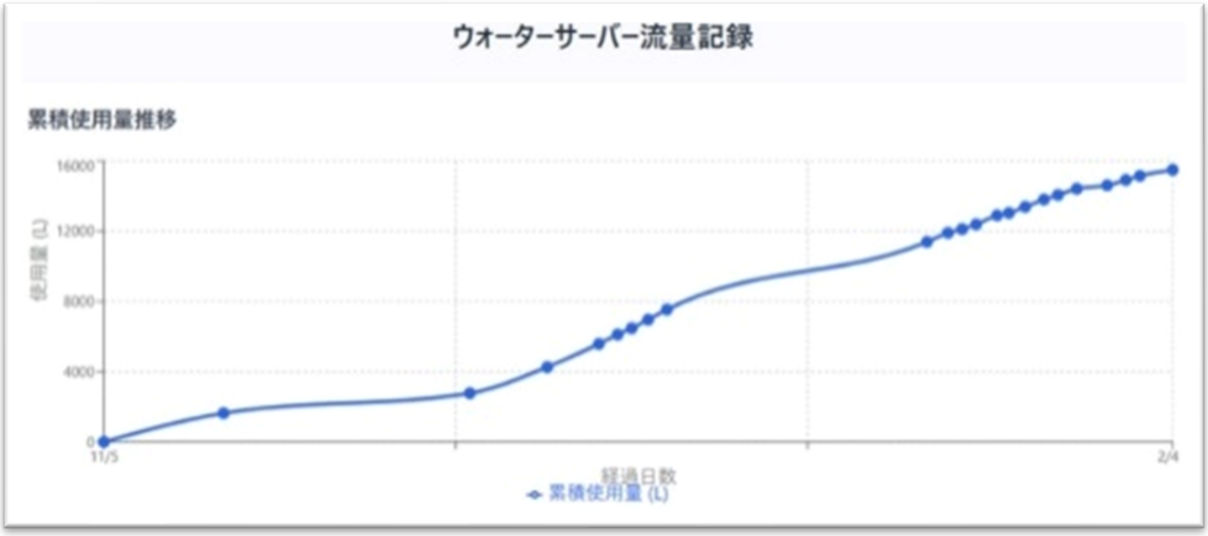
8.〈マイボトルを持とうプロジェクト〉ウォーターサーバーサービスの展開

マイボトルを持とうプロジェクトは、学内のペットボトル使用量を削減することで環境負荷を軽減し、学内の SDGs 実践を促進することを目的として、マイボトルの利用を促す活動をしている。

2024 年 5 月より、本学生協食堂へのウォーターサーバーの設置と運営のサポートを開始した。生協食堂では、同年 11 月 5 日に生協食堂にウォーターサーバーを 1 台設置し、運営を開始した。ウォーターサーバーの維持費の回収のため、ウォーターサーバー利用券（ステッカー）を購入し携帯している人のみが利用可能というサブスクリプションサービスとなっている。

2025 年度も引き続き、上記 1 台のウォーターサーバーについてサービスを継続した。4 月～9 月末まで利用可能な利用券（ステッカー）を 500 円で販売した（第 2 期）。第 1 期の利用者からの「ステッカーが劣化しやすい」とのフィードバックを踏まえ、第 2 期では「ステッカーが劣化した場合は何度でも交換可能」とし、各広報物にもその旨を記載した。

第 2 期の利用券購入者数は 265 名となり、2024 年 11 月～2025 年の 3 月（第 1 期）の 91 名を大幅に上回る結果となった。第 2 期（2025 年 4 月～9 月）における給水量については、（流量計の確認が 2025 年 7 月～10 月に滞ってしまったため正確な数字ではないものの）約 6,500L と推定され、500ml ペットボトルに換算すると約 13,000 本の削減となった。



（設置開始から現時点までの給水量グラフ）

また 2025 年 9 月からは、2026 年 3 月末まで利用可能な利用券（ステッカー）を 150 円で販売した（第 3 期）。第 3 期には、第 2 期のフィードバックを踏まえ、①常温/冷水の説明と②ウォーターサーバーの清掃方法について改善を行った。第 3 期の利用券購入者数は、1 月 22 日時点で 266 名であった。第 3 期の給水量は 2 月 4 日時点で約 6,000L で、500ml ペットボトルに換算すると約 12,000 本の削減となった。

さらに、今年度はプロジェクト活動の学内外への発信にも力を入れた。本学の授業 LA 科目「生命と環境 21 海洋環境と生物多様性」において活動紹介を行った他、研究所 Instagram を通じて、給水量報告やマイボトル利用効果に関する発信を行った。

（作成した常温/冷水説明ポップ）

2024 年 11 月 5 日の設置開始から 2026 年 2 月 4 日までの総給水量は 15,491L にものぼり、これは 500ml ペットボトル 30,982 本に相当する。今後もよりよいサービスの提供及びマイボトル利用の環境効果についての発信を通じて、学内のマイボトル利用をより促進していきたい。

9.「～食べ残しをなくそう！～食品ロス削減 mottECO FESTA 2025」「第 9 回食品ロス削減全国大会 in 千代田」への参加

	mottECO FESTA 2025	第 9 回食品ロス削減全国大会
日程	2025 年 7 月 1 日(火)	2025 年 10 月 30 日(水)
場所	ホテルメトロポリタンエドモント 2 階（東京都千代田区）	大手町プレイスホール&カンファレンス（東京都千代田区）

産官学アライアンス「mottECO 普及コンソーシアム」主催の mottECO FESTA 2025 と、「全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会」主催の第 9 回食品ロス削減全国大会 in 千代田に、本委員会も参加した。「mottECO(モッテコ)」とは、中央省庁（環境省、農林水産省、厚生労働省、消費者庁）が推奨する、食べきりや適量注文はもちろん、外食先での食べ残しの持ち帰りを推奨することで、官民一体で食ロス削減を目指す取組のことである。

「食品ロス削減全国大会」は、食品ロス削減に対する国民の意識の醸成、社会的な機運を高めることを目的に、10 月 30 日の「食品ロス削減の日」に合わせて開催される全国規模のイベントである。

両イベントとも、本学における食品ロス削減に関する取り組み（※①②）をポスターにまとめ、出展した。また、研究所や OCHA-SDGs 学生委員の取り組みに関する資料（研究所リーフレット、OCHA-SDGs 学生委員会活動報告書、食品ロス削減に関する研究論文※③等）を配布し、本研究所の取り組みを広報した。

※①　フードドライブ：2022 年より株式会社セブン＆アイ・ホールディングスと協同実施しているフードドライブの活動内容。
※②　規格外野菜：2024 年度に行った、学生委員会規格外野菜プロジェクトのメンバーによる、農業従事者を対象とし、規格外野菜の活用の現状と問題点に関するインタビュー調査。
※③　研究所の研究員や学生が関わった 3 つの論文。

（本研究所ブースの様子）

今後も、生活者がどのように食品ロス削減を凝らしているか、学生ならではの発想を活かし連携していく。

10.「おにぎりアクション 2025」「おにぎりアクション FOR JAPAN」への参加

NPO 団体 TABLE FOR TWO によるおにぎりアクション 2025（10 月 7 日(火)～11 月 15 日(水)）とおにぎりアクション FOR JAPAN（11 月 18 日(火)～11 月 30 日(日)）に、本委員会も昨年度に引き続いて、本研究所の SNS アカウント（X・Instagram）で写真を投稿する形で参加した。今年度のおにぎりアクションでは委員内から 35 枚以上の写真が投稿された。また、おにぎりアクションを通して約 116 万食の学校給食がアフリカ・アジアの子どもたちに届けられ、食事チケット 100 万円分が日本の子どもたちに届けられた。世界の子どもたちへの支援になるだけでなく、学生間でもプロジェクトを横断した交流が広がった。このような活動への参加を通して、今後も、国内外の問題を身近に捉え考えを深めていきたい。

（委員内で投稿された写真の例）

11.「文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会」への参加

2025 年 10 月 31 日(金)に文京区民センター（東京都文京区）にて、「第 4 回文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会」に参加した。

本催しは、区内の大学と区内に関連する企業が参加し、各大学･団体が日頃のサステナビリティに関する取組について発表、参加者で意見交換をする会である。今回は跡見学園女子大学、中央大学、東京大学、東洋大学、日本女子大学、東京大学消費生活協同組合及びお茶の水女子大学が発表を行った。

（発表を行う OCHA-SDGs 学生委員会委員長）

本研究所からは本委員会委員長が発表を行い、本研究所と連携して活動を行う学生組織 OCHA-SDGs 学生委員会の紹介や、ロジックモデルなども活用し未来を見据えた持続可能な活動をしていることを報告した。

本研究所の取組を多くの方々に関心を持ってもらう機会となったのと同時に、区内の大学・企業と意見や感想を共有し相互に交流する機会となった。

12. 徽音祭への出展

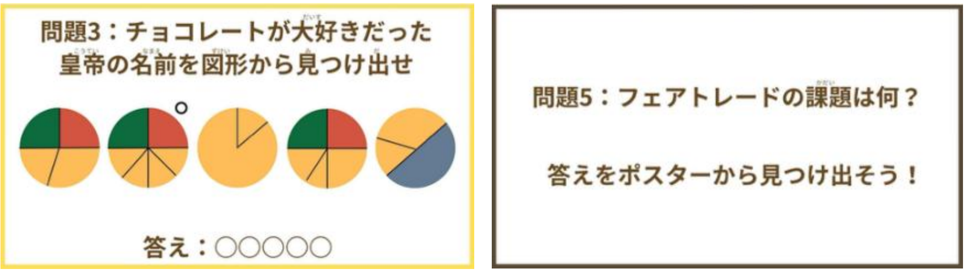
2025 年 11 月 8 日(土)～11 月 9 日(日)に開催された徽音祭にて、ホットチョコレートの提供やポスター展示、クイズラリーなどの企画を行った。

サステナブルなチョコレートを使用したホットチョコレートの提供により、多くの方に足を運んでもらうきっかけを作ることができた。来場者にはチョコレートと SDGs について扱ったポスターも併せて提示し、フェアトレードや少年労働

をはじめとした環境や社会に関する問題を知ってもらう機会を提供した。また、年齢に関係なく楽しめるクイズラリーを実施することで、より多くの方が SDGs を身近に感じられるよう工夫した。各プロジェクトの活動を紹介する展示と併せて、学生委員会の取組を幅広い来場者に伝えることができた。

2 日間の来場者数は、1 日目が 208 人、2 日目が 174 人であり、徽音祭を通じた幅広い対象者への SDGs 推進に貢献できたと考える。

(チョコと SDGs に関するポスター)



(チョコレートに関するクイズラリー)

13. 公開シンポジウム「災害レジリエントな社会の実現に向けて　～避難生活の質の向上を目指す～」でのポスター掲示

2025 年度 2 月 17 日(火)に本学創立 150 周年を記念して、SDGs 推進研究所主催、東京ガス株式会社共催、日本工営株式会社・埼玉大学協力の公開シンポジウム「災害レジリエントな社会の実現に向けて　～避難生活の質の向上を目指す～」が開催された。当日は本学の関係者（教職員・学生等）のみならず、附属高校を含む学生のほか、自治体職員、企業関係者、一般など、100 名を超える参加者が来場した。

本委員会はその中でロジックモデルを含む各プロジェクトの活動を報告するポスターを掲示し、シンポジウム開始前にはポスターを見た参加者からの質問に学生委員が対応した。一般の方々だけでなく、プロジェクトの活動と関連する事業を展開する企業からも高い関心が寄せられ、活動の周知を図る良い機会となった。

今後は、本シンポジウムで得られた意見や他団体・企業からのフィードバックを踏まえ、各プロジェクトの内容をさらにブラッシュアップしていくことが考えられる。また、今回のような対外的な発信の機会を継続的に設けることで、活動の認知度向上とともに、新たな連携や協働の可能性を広げていきたい。

＊各プロジェクトのロジックモデル（プラントベースフード、規格外野菜を除く）

おゆずりフェスプロジェクト

ロジックモデル

ボトルネック
おゆずりフェスの認知度の低さ

仮説
広報を強化することで、認知度の低さが改善されるだろう

資源 Inputs	活動Activities	直接の結果 Outputs	成果 Outcomes			未来像 Impact
			初期	中期	最終	
1.人手を確保する 2.広報の許可を得て、広報素材を作成する 3.集めたものを保管する場所を確保する（現在は事務局のスペースをお借りしている）	1.広報を強化する 2.開催時期を早めに確定し、公表する（半期に一回など）	1.お茶大内でおゆずりフェスの認知度が上がり、おゆずりフェスに来てくれる人に限らず学内で知られるようになる 2.開催時期を早めに確定し、公表することで、ものを捨てるタイミングでおゆずりフェスに出すという選択肢を選びやすくなる	・まだ使えるもの（資源として使えるものを含む）はすぐ捨てるのではなく、何らかの活用を考える人が増える ・おゆずりフェスの存在を知ってもらう	・おゆずりフェスの回収BOXに出される量が増える ・多くの人におゆずりフェスに参加してもらう	お茶大生・教職員が、日常生活で資源循環を意識した行動を取り入れるようになる	一人ひとりが、資源循環を自分事としてとらえ、行動する

徽音祭

ロジックモデル

ボトルネック
企画の独自性の不足、宣伝の不足、委員同士の交流の不足、活動の継続性や発展性へのつながりにくさ

仮説
・ユニークな内容で出展し、多くの人がブースに来てくれれば、委員会の認知度を上げることができるだろう
・委員同士が当日仲良くなり、徽音祭の前に共通認識を形成すれば、委員会の団結力が高まり、活動の継続性や発展性が強化されるだろう

資源 Inputs	活動 Activities	直接の結果 Outputs	成果 Outcomes			未来像 Impact
			初期	中期	最終	
1. チョコレート、ドリンクメーカー、紙コップ 2. チョコレートまたはチョコレートに関連するSDGsについての知識、それを実装するための道具類 3. 各リーダーからの資料	1. 定例会でGood and New（最近あったいいこと、発見したことの共有） 2. やること＋ロジックモデル共有 3. 宣伝（呼び込み、委員会・徽音祭実行委員会のSNSでの宣伝） 4. ホットチョコ試飲 5. チョコレートのクイズラリー、謎解き 6. 普段の委員会の活動展示	1. 来場者がチョコレートの魅力にさらに気づくことができる 2. 来場者がチョコレートに関する関心や理解を深めることができる 3. 来場者が普段の活動に関心を示す 4. 委員同士が協力して企画運営する	1. 委員同士が当日仲良くなっている 2. 徽音祭の前に共通認識を合わせられている、委員会として徽音祭での温度差を合わせられている 3. ユニークなアクティビティを行うことができている 4. たくさんの人がブースに来てくれている	1. 徽音祭当日に委員会として団結できている 2. 飲むチョコレートで徽音祭を盛り上げられている 3. 委員会の認知度が上がっている	OCHA-SDGs学生委員会がSDGs に取り組む中心的存在として認知され学内外からの協力が得られ、継続的に社会に波及効果をもたらす活動を展開できている	委員会として団結して、「飲むチョコレート」で徽音祭を盛り上げつつ、OCHA-SDGs 学生委員会のことを知ってもらう

北区食品ロス削減プロジェクト

ロジックモデル

ボトルネック

制度&食ロス削減意識を広められるか

仮説

事業者へのメリット商店街への働きかけ、年度初めを中心とした広報があれば制度の啓発につながるだろう
ポイントやパンフレット、食ロスを実感できる機会があれば消費者への意識啓発につながるだろう

資源 Inputs	活動Activities	直接の結果 Outputs	成果 Outcomes			未来像 Impact
			初期	中期	最終	
1.インタビュー 2.アンケート 3.宣伝 4.パンフレット/ステッカー	事業者にとって何がメリットになるのか、アンケートで把握する	事業者が登録したいと思えるような制度づくりにつながる	登録してもらえるようなメリットのある制度を作る	ステッカー/パンフレット配布やポイント給付を行う	登録期間開始から1年で60店舗に登録してもらう	1.より多くの事業者が食品ロスを削減する 2.北区で食ロスへの意識が高まる

手話べりプロジェクト

ロジックモデル

ボトルネック

①参加者の少なさ、SNS閲覧数の減少
②言語だということをしっかりと打ち出せていない

仮説

・手話べり会をより人の目につく場所で開催したり広報を工夫すれば、より多くの参加を見込めるだろう
・手話べり会以外での手話を知る場を作れば、手話に興味を持つ人が増えるだろう

資源 Inputs	活動Activities	直接の結果 Outputs	成果 Outcomes			未来像 Impact
			初期	中期	最終	
・手話に関する本を集める ・ 指文字表を配る ・ 事務局と連携を取る ・他プロジェクトと連携できるリワードを用意する ・手話ネイティブの方と連絡をとる、徽音堂の申請をする ・お茶大附属校と連携する、授業内容を決める	・図書館で手話に関する資料を置いたり、人目のつく場所で手話べり会を開催する ・グッド&ニューで手話を取り入れる ・ビラ配りを行う、通年ポスターを貼る ・事務局のSNSやSlack(Ochat)、委員会のDiscordのアナウンスを使用して広報する ・スタンプカードを作成し、手話べり会のリピート率を増やす ・手話ネイティブからの講演を行う ・小中学校で出張授業を行う	・手話べり会が開かれた会になる ・手話を知る人が増える ・手話に触れたことがある人が増える ・手話べり会のリピート率が上がる ・手話のリアル・正しい知識が増える ・大学コミュニティ以外で手話を普及させる	・より多くの人に手話べり会を知ってもらう ←目に留まる回数を増やす	・手話べり会の参加者数を増やす ―――――― ・言語としての手話であることを広める ・手話べり会以外での手話経験をしやすくする	今より多くの参加者に、言語の一つとして興味を持ってもらう	言語の一つとして興味を持ってもう、手話を勉強しやすい環境がある （手話は言語であり、福祉の道具ではない)

他大学連携部

ロジックモデル

ボトルネック

・活動の全体像が見えにくい。
・活動がSDGs達成にどのように関わるかが分かりにくい。
・マニュアル整備、世代間引き継ぎができていない。
・成果の定量評価・可視化ができていない。
・地域との関わりが少ない。
・SDGsに関心がない人への発信が不十分である。

仮説

・他大学連携の目的や活動成果を明らかにすることで、委員会内の学生の理解が深まり、他のプロジェクトと連携しやすくなる。また、活動に参加しやすくなり、プロジェクトのメンバーが増えることでイベントに継続参加できるようになる。

・クールアースフェアやsustainability weekなどを通して、SDGsに関心があまりない人に委員会の活動を知ってもらえるようになり、地域との関わりが増える。また、他大学交流で得たつながりを他のプロジェクトに還元しやすくなる。

資源 Inputs	活動Activities	直接の結果 Outputs	成果 Outcomes			未来像 Impact
			初期	中期	最終	
1. 各プロジェクトとのつながり 2. 各大学とのつながり 3. 今までのイベントに関する資料	1. クールアースフェア →委員会内での呼びかけ →学生に対する宣伝 →来場者数等の計測 →アンケートの実施 →イベント後の報告 →研究所のSNSの利用 2. Sustainability week →委員会内での呼びかけ →来場者数等の計測 →アンケートの実施 →イベント後の報告 →研究所のSNSの利用	1. プロジェクトの活動に対する委員会内の学生の理解が深まる。 2. 活動に参加しやすくなる。	1. 他のプロジェクトと連携しやすくなる。 2. 活動メンバーが増える。	プロジェクトがイベントに継続して参加できるようになる。	1. SDGsに関心があまりない人に委員会の活動を知ってもらえることで、地域との関わりが増える。 2. 他大学交流で得たつながりを、委員会の他のプロジェクトに還元しやすくなる。	1. SDGsに関心があまりない人に委員会の活動を知ってもらえるようになり、地域との関わりが増える。 2. 他大学交流で得たつながりを、委員会の他のプロジェクトに還元しやすくなる。

フードドライブプロジェクト

今後実施したいこと

ロジックモデル

ボトルネック

学生委員：寄付したい人の参加への障壁、要望を十分に把握できていない。情報発信の機会が限られている。
参加者：寄付に対して具体的なイメージを持ちづらい。認知、当事者意識が十分でない。

仮説

・フードドライブへの認知度・関心を調査すれば，現在の状況とそこに対するアプローチを確立できるだろう
・フードドライブの機会を設けることで、存在そのものを知ってもらうきっかけになるだろう
・参加への考え方や他の参加形態を提案することで、寄付のハードルを低くすることができるだろう

資源 Inputs	活動Activities	直接の結果 Outputs	成果 Outcomes			未来像 Impact
			初期	中期	最終	
研究所・附属学校園の先生方 附属学校園及び大学の在籍者 回収BOX 設置場所 広報手段	フードドライブについての発信 寄付以外の参加形態の提示 フードドライブ開催前の大学内での普及活動 受け取る方の食品のニーズを把握する調査・アンケート	・参加者が現状や背景を知ったうえで参加できる ・食品の寄付が難しくても、間接的に支援に加わる人が増える ・参加者が現状や背景を知ったうえで参加できる ・参加者が何を寄付したらよいかわかる。ニーズに適した寄付が増える。	・附属学校園との連携が活かされている ・参加の機会が増える ・参加への障壁を把握できている ・認知度調査で十分な回答数と認知度が確認されている ・対象者に届く広報が行われている ・受け取る方のニーズが認知されている	・在籍者がフードドライブを身近に感じている ・参加者に適合した活動が実施されている ・活動が社会(学外)に繋がっている	附属学校園及び大学の在籍者が、フードドライブの意義まで認知し、自ら行動を起こすことを起点として、社会にフードドライブが広まる	食品廃棄量の削減 貧困層の食糧事情の改善

マイボトルを持とうプロジェクト

ロジックモデル

ボトルネック
・宣伝不足
・ウォーターサーバーのアクセシビリティの低さ

仮説
宣伝不足には活動成果やマイボトル携帯の利点などの広報を増やし、ウォーターサーバーのアクセシビリティの低さにはウォーターサーバーのサービス改善を進めることで、生徒・教職員の環境意識やマイボトル携帯に関する問題が解決できるだろう。

資源 Inputs	活動Activities	直接の結果 Outputs	成果 Outcomes			未来像 Impact
			初期	**中期**	**最終**	
研究所や委員会のSNS宣伝の許可、ビラ配布の許可 人材	広報内容検討・吟味（環境に関すること、ウォーターサーバーについて） 広報の機会を増やす	宣伝内容がより効果的なものになる 宣伝を見てくれる人が増える	宣伝の効果が出る	＜意識変容＞環境保全意識や参加意識が向上する	在学中も卒業後も環境保護の側面を理解した上でマイボトルを持ち歩いてもらえる	学生・教職員にマイボトル携帯を通じて環境保全への参加意識を持ってもらい、かつペットボトルゴミによる環境負荷を削減する。
サービス改善アイデアのためのリサーチ 掃除用具	現状のサービス改善（掃除・UI/UXなど） 広報(支出内訳など信頼性を向上できるような発信)	利用の際の分かりやすさが向上し、また安心して使えるようになる	ウォーターサーバーが使いやすくなる	＜行動変容＞マイボトルを携帯するようになる		

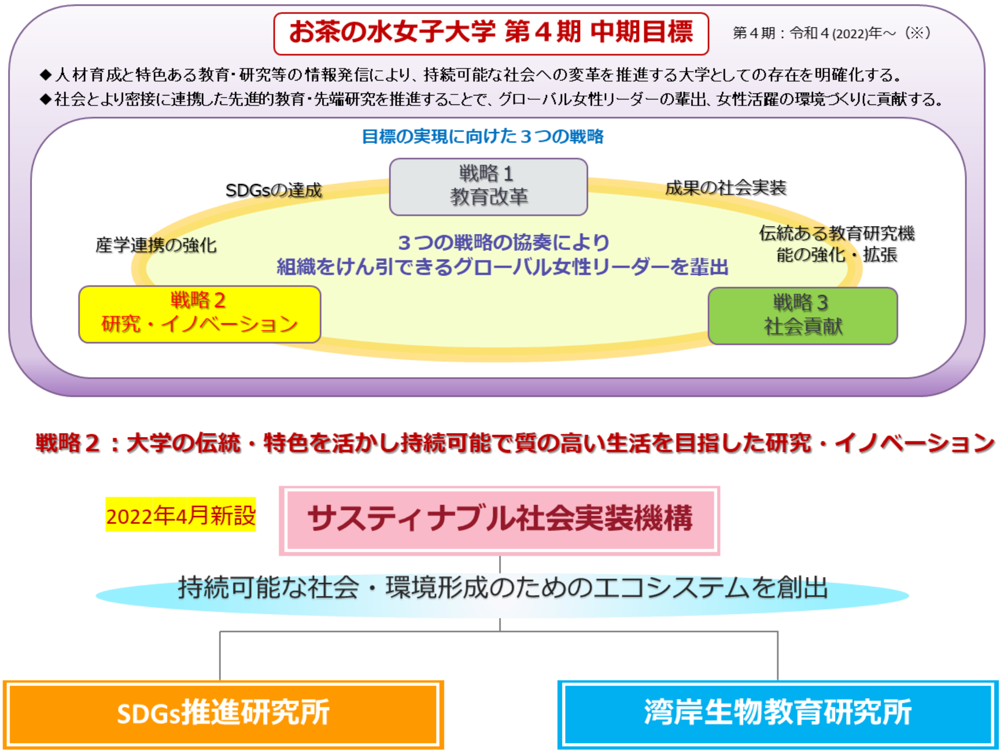
Ⅲ SDGs 推進研究所について

1. SDGs とは

SDGs とは Sustainable Development Goals（サスティナブル・ディベロップメント・ゴール；持続可能な開発目標）を表す。2015 年 9 月の国連サミットにおいて全会一致で採択された 2030 年までによりよい世界を目指す 17 個の目標と 169 の具体的行動からなる。地球上の「誰一人取り残さない」という理念のもと、開発途上国と一緒になって先進国も積極的に取り組んでいる。

2. 研究所設立の経緯

設立以来「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」をミッションとして掲げ、女子の高等教育と高度人材の輩出に貢献してきたお茶の水女子大学の理念は SDGs の目指す理念と合致するものである。持続可能な社会の創成には、社会全体で SDGs の達成を推し進めることが必要であり、そのために行動できる人材の養成が急務であることから、SDGs 教育・研究プログラムを企画・実行していくための組織「サスティナブル社会実装機構」が 2022 年 4 月に新設された。サスティナブル社会実装機構は、SDGs 推進研究所と湾岸生物教育研究所の 2 施設から構成される。



（※）中期目標：文部科学大臣が６年間において国立大学法人が達成すべき業務運営に関する目標を中期目標として定め、これを国立大学法人に示すとともに公表するもの。
第１期 平成16(2002)年度～、第２期 平成22(2010)年度～、第３期 平成28(2016)年度～

サスティナブル社会実装機構及び SDGs 推進研究所設立の経緯

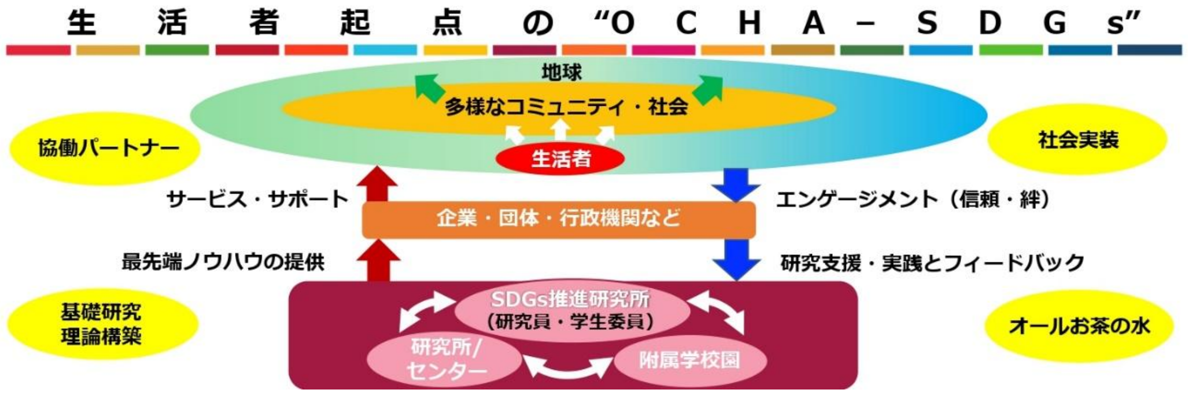
3．研究所の組織構成

研究所は学内の教員や客員研究員から構成され、研究所の役割は、研究部門、教育部門、企画・調整部門として 3 つに分けられている。研究部門で行われる研究を、教育部門において大学や附属学校園の教育に展開していく。さらに、企画・調整部門においては、SDGs 活動の支援、広報、学内外の連携調整のほか、THE インパクトランキングエントリーへの対応を行う。これらの 3 つの役割全体を統括することで、研究成果や教育実績を社会実装し、本学における SDGs 推進を機動的に進める。

4．研究所のミッション

持続可能な未来の構築に向けて世界的な動きが加速する今、SDGs 推進研究所は、本学の特色である生活科学を中心とした研究実績を社会に実装するための統合拠点となると同時に、高い問題意識・率先した行動力を持つ未来のサスティナビリティリーダーとなる人材の育成を担う。本研究所を起点として、SDGs 教育・研究プログラムを企画実行し、地域社会・民間企業・各種機関と連携し、社会全体で SDGs の達成を推進する人材養成を行う。

SDGs 推進研究所では、お茶の水女子大学で展開される SDGs に向けた諸活動を「OCHA-SDGs」と名付けることとした。この SDGs 推進研究・活動のキーワードは「生活者」である。SDGs の実現には長期的な視点のもと、生活者一人一人が足元から着実に推進していくことが重要と考えたためである。まずは、食品ロスや資源リサイクル、エコシステムや行動科学、消費者教育といった身近なテーマに基づき、SDGs に関心の高い学生委員と共に、持続可能な社会への貢献を目指した生活者起点の研究・活動を推進中である。



OCHA-SDGs が目指すこと

OCHA-SDGs 学生委員会 2025 年度 活動報告書

2026 年 4 月
発行：お茶の水女子大学 サスティナブル社会実装機構 SDGs 推進研究所

〒112-8610
東京都文京区大塚 2-1-1
Tel：03-5978-2568
Fax: 03-5978-5766
E-mail：sdgs-office@cc.ocha.ac.jp